

2020
秀作

第18回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

現金とキャッシュレス決済が共存する為に

青森県・青森明の星高等学校 2年 肴倉 ほの花

日本の偽札防止技術は世界で最も優れていると私は考えている。日本のお札は国立印刷局で製造され、公になっているものだけでも11もの高度で特殊な偽造防止技術が用いられている。例えば、すき入れバーパターンやホログラム、パールインキなどすべての技術において決してまねできないようになっている。また、一度流通したものは再度日本銀行に戻った際、すべて鑑査され、汚れているものなど流通に適さないものは裁断される仕組みになっている。このようにお札のクリーン度や日本国民のお札に対する信頼度が保たれているからこそ、今でも日本人は現金を持ち歩き、財・サービスの購入をしていると私は考えている。

しかし、グローバル化が進む今、世界では、キャッシュレス決済の需要が高まっている。日本は、キャッシュレス決済の普及が、かなり遅れている。具体例として、2020年1月に発表された経済産業省の調べによると、日本のキャッシュレス決済比率は国民の消費支出総額に対して約20%にとどまっているが、他国では40～60%台となっている。特に、最もキャッシュレス化が進んでいる韓国の比率はなんと96%以上であることが分かった^{注)}。このことから日本と世界のキャッシュレス化の差が歴然であることは明らかである。

実際に、私がアメリカでキャッシュレス決済の普及について、体験したことがある。昨年7月、私は文部科学省が主催する「トビタテ！留学JAPAN」5期生としてニューヨークに留学した。私が利用していたマンハッタンのスーパーや薬局のメインカウンターではカードや携帯でしか会計が出来ず、セルフカウンターのみ現金を使うことが出来るようになっていた。比率としては、現金を使うことが出来るのは約25%だった。このような環境の中、自然と現金を使うことが少なくなっていった。

アメリカでは、多くの偽札が出回り、同時にそのことに関する多くの冤罪事^{えん}

件が発生することが問題視されている。キャッシュレス決済が普及する理由として、冤罪事件等の未然防止の意味合いもあると考えられる。また、ここ最近になってアメリカ全土に広がっている暴動のきっかけであるジョージ・フロイドさんの事件もその冤罪事件の一つだ。事件のきっかけが偽札疑惑によるものだったと知った時、私はとても恐怖を感じた。このような事件はお札への信用性が高い日本ではあまり聞かない事件であり、もしアメリカで偽札が問題視されていなければ起こっていなかった可能性がある。だからこそ、改めてお金への信頼度の大切さを実感した。

日本では、現金しか使えない店があっても、キャッシュレス決済しか出来ない店はないに等しい。この環境と、他に類を見ない偽造防止技術が施された「日本銀行券」が背景となり、日本ではキャッシュレス決済がなかなか浸透していないのではないかと考察する。

私は、必ずしもキャッシュレス化が今の日本に必要であるとは思っていない。しかし、グローバル化への対応は必要である。そのためには、日本国内でのキャッシュレス比率は高めなければならない。現在、国内のキャッシュレス化の格差は激しい。例えば、地方と都市部での電車やバスを利用する際のことを挙げる。東京や大阪などの大都市圏ではスイカやパスモなどを公共交通機関で使うことができる。しかし、私が住む青森県はバスやタクシーはもちろん電車に乗る時ですらそれらの電子決済を利用出来ないことが多い。このような格差があれば、観光客が訪れた際に多くの弊害が生じてしまう。それによって経済面に差を感じ、さらに設備面においても差が広がると考えられる。来年に東京オリンピックを控え、観光客の増加が見込まれる今だからこそ、世界における日本の経済的、政治的地位を高め、グローバル化の波に乗るためにもキャッシュレス化の促進は必要不可欠である。

そうはいても、お札がなくなりすべてがキャッシュレス決済になってしまうと、現金主義で紙幣や硬貨で支払いをしたい人たちは困ってしまう。地域格差問題が解決しても、世代格差問題が大きくなる可能性も考えられる。スマートフォンやタブレットを主として使用するキャッシュレス決済は、利用していない人・できない人の経済活動を止めてしまう。生き辛^{づら}さを感じる人がいる世の中は、理想の社会といえない。

だからこそ、お金の信頼度が高い日本で、キャッシュレス決済が浸透することには意味がある。この2つの決済方法が共存することによって、これまで以上に経済活動が活発になる可能性がある。困難を感じる人もなく、理想的な社会が形成される。理想を実現するために、先に挙げたキャッシュレス決済の浸透率を上げなくてはならないと思っている。

私は日本にすべての年代すべての地域の人々が平等に暮らせる国であってほしいと考えている。だからこそ、キャッシュレス化が促進されても日本銀行券は必要不可欠であると確信している。日本が世界のモデルとなり、信頼性の高い銀行券を国家が維持することが、経済活動の活発化につながり、さらに、その他の決済方法が選択できるようになることが望ましい。

これまでの世界を作り上げてきたお札とこれからの経済を担うキャッシュレス決済が共存できれば、すべての人が平等かつ幸せに暮らせる世界に近づくと考えている。それが出来るのが私たちの暮らす日本なのだと考えている。だからこそ私は、今までのようにお金を信じ、大切にしていきたい。他のどの国のお金よりも美しく信頼性のある、この国ならではの「日本銀行券」そのものを。そしていつか両方が共存できる日が来ると信じている。

(注) 経済産業省 商務・サービスグループ キャッシュレス推進室「キャッシュレスの現状及び意義」

2020年1月

URL https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/cashless/image_pdf_movie/about_cashless.pdf

閲覧日 2020年7月24日

